

服飾造形学科の専門教育科目「ファッションショー」の 導入と実施について

鬘谷要, 石原頼子, 榎本春榮, 嶋根歌子, 高橋和雄, 仲村洋子,
羽生京子, 布臺博, 福田瑛子

Introduction and enforcement of "Fashion Show" as a special subject of department of costume and art

Kaname KATSURAYA, Yoriko ISHIHARA, Harue ENOMOTO,
Utako SHIMANE, Kazuo TAKAHASHI, Youko NAKAMURA,
Kyoko HABU, Hiroshi FUDAI, Eiko FUKUDA

1. 緒言

今日の家政系学部の被服・服飾分野を専門とする学科においては、社会的要請が多様化する一方で、入学者の基礎学力の低迷という問題を抱え、実質的教育効果の高いカリキュラム編成が、各大学の大きな課題の一つとなっている。

和洋女子大学服飾造形学科においては、創立以来の伝統を受けながら技術の本質を習得させることで、上質のものづくりを実現することを目指してきた。この方針は卒業生および社会的な評価に裏付けられ、連綿と受け継がれ今日に至っている。

一方で若年層の服飾分野における文化的嗜好は、マスコミや高度情報化社会などの影響もあり、極めて多岐にわたるようになったと同時に、情報発信型の活動を好むようになってきた。また1990年代頃から服飾分野の高等教育機関で、ファッションショー形式の作品発表が散見されるようになってきた。

このような背景の中で、我々も2000年から2年間にわたり正課のカリキュラムにファッションショーの導入を検討し、2002年の入学生から1年間の制作期間を正課の授業に組み入れ、それに続く形でショーを実施した。

本報文では、これらの経過と教育効果ならびに問題点について報告する。

2. 経過

2-1. 導入計画

2001年当時、服飾造形学科の学科会議において新しいカリキュラムの編成が行われる際、高い教育効果を持ち、学科の理念を表現することで、物作り分野における入学志願者への訴求効果が期待できるようなカリキュラムが議論されていた。そのような中で、服飾系学科を擁する大学で少しずつ実施が拡大していたファッションショーの導入が検討された。しかしながら当初は作品の構成以外の、施設・設備から舞台演出まで実現するために必要な種々の情報が皆無の状態であった。そこで本節次項以下に述べる方法で準備から着手した。

2-2. 施設・設備計画

まず実施場所についての検討が開始された。各種前提条件が議論される中で、ショー形式で見せるためには観客の動員が課題となるため、大学祭期間に学内で実施すべきだとの意見でおおよその一致を見た。これにより会場は学内施設を使用することとなり、既存施設としては講堂が第一選択肢として考えられた。ただし、和洋女子大学の講堂は収容定員が1900名と過剰な規模であること、舞台形状がファッションショーには不適切であることが問題であった。

時期を得て、和洋女子大学ではキャンパス整備計画の一環として図書館機能と講義室機能を併せ持つ新館建設の設計が開始され、学会等が開催できる汎用性の高い多目的教室の設置が具体化した。我々は学科として新館の設計・建設委員会（当時の呼称：西館建設プロジェクト）に対して、ショーに適した形状の舞台設備と、照明機材を懸架・制御するためのバトンと呼ばれる専用設備の設置希望を提出した。建設委員会および施設課と設計業者（石本建築事務所）、施工業者（戸田建設）、什器業者（コトブキ）、照明専門業者と協議の結果、可動式の教壇とそれに続く組み立て型の舞台および、その舞台形状に合わせた「口」の字型のバトンの配置が決定された。さらに客席は、専用の舞台が設置された場合に、舞台を囲むように配置できるように一部の座席と机は可動式とされた。舞台設置時には可動部分の机を撤去できることから客席数は平常時の288席と比較しても遜色のない250席を確保することが出来た。図1の(a)と(b)に当該教室の座席配置を示した。(a)が平常時の配置で、(b)が舞台設置時の配置である。(b)の赤で示した部分が舞台とそれに併せて設置される可動式の椅子を示している。

2-3. カリキュラム編成

ハードウェアとしての施設・設備面の問題が解決されると、続くソフトウェアとしての

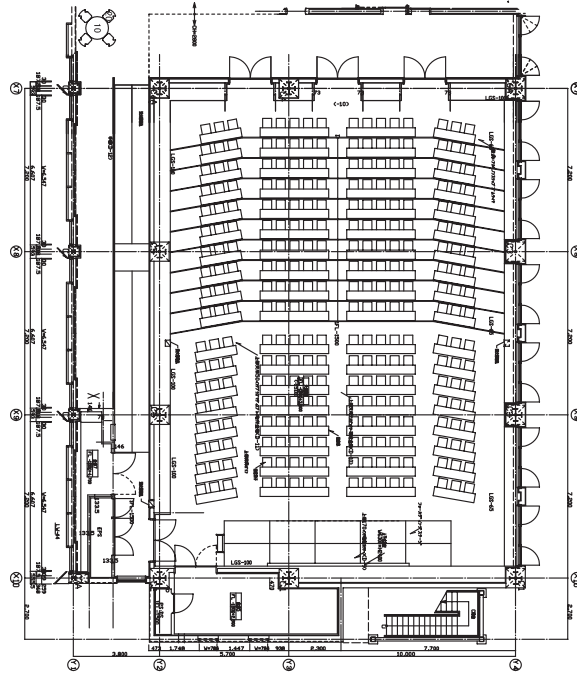


図 1 (a)

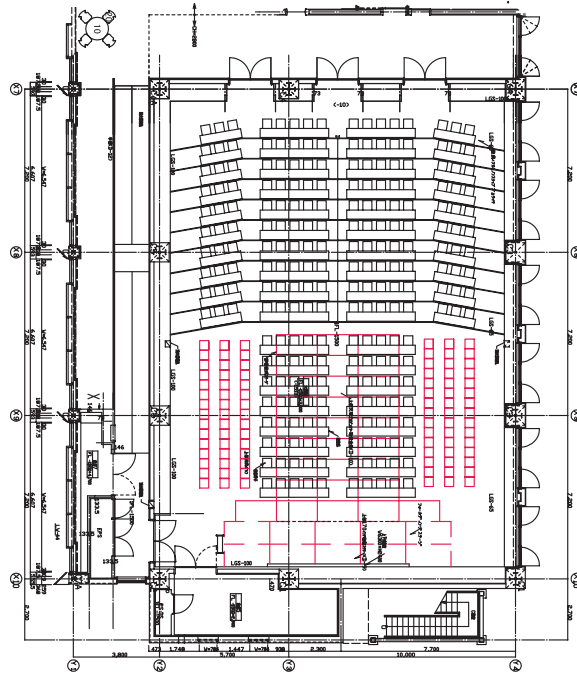


図 1 (b)

「ファッションショー」の実現は、作品の制作とショー自体の企画・運営に大別され進められることになる。学科では作品の制作と舞台構成や演出等に最低1年は必要であると判断し、11月の大学祭実施が前提となることから、実施前年度の後期と実施該年度の前期に、制作と準備のための企画・制作科目を設定することとした。配当学年については、当該学生の3年次での実施と4年次での実施で意見が二分されたが、卒業論文・制作への影響を慎重に考慮し3年次での実施が決定された。

科目名は作品の制作と、舞台の構成・演出を抱合する位置付けとし、「ファッションショー企画・制作Ⅰ」、「ファッションショー企画・制作Ⅱ」として2年次後期と3年次前期に開講することとした。学科の看板科目であると同時に、クラス全員の共同作業による連帯感の形成や、全員にオリジナル作品を発表させる機会を与えるという狙いから、初年度は必修科目の設定とした。また、単位認定条件として履修者全員に対し、それぞれ一作品を制作させ、原則として本人がそれを着装して舞台上がることを課した。

また、連帯感を持って全課程を進めるために、テーマアップとグループ編成のために2年次前期に1回、経験のない学生がモデルを務める事から、ウォーキングの指導と練習に3年次後期に1回、それぞれ2泊3日の佐倉セミナーハウスでの宿泊研修を正課のカリキュラムに組み入れた。

2-4. 作品制作

宿泊研修と「ファッションショー企画・制作Ⅰ」の最初の2回程度を用いて、テーマ、シーンおよびグループの決定を行った。次にそれを受けて一人3点のデザイン画を提出させ、複数の教員の指導の下、本人との討論の上各人一点に絞り込んだ。これを基本設計としてシーチングによる原寸の試作までを企画・制作Ⅰの範囲で行った。続く「ファッションショー企画・制作Ⅱ」では、Ⅰのシーチング作品を基に、本制作を行った。

成績評価はⅠでは、デザイン画とシーチング作品により、Ⅱでは本作品によって行った。自分の技量に見合った作品のレベル設定と、時間管理が出来ない学生が併せて20~30%に上り、期限に作品を完成できないケースが続出した。一定の期限延長措置による救済措置を行っても提出できない者には、教育的配慮から出展停止の措置を執った。

和裁分野での制作については、シーチングによる試作が行えないため、当初から本作品に着手する連続した制作過程の中で、担当教員による通過点の設定を行い、Ⅰ、Ⅱそれぞれの成績評価を実施した。

2-5. 舞台設営・演出

舞台全体の意匠と、照明装置、制御機器の手配および操作については、学科で経験がなかった事から専門の業者に依頼することとした。舞台天板の設営は学生と教員でも可能な範囲で設計されていたが、天板重量が数十キロもあることから、安全のため舞台業者に併せて委託することとなった。

舞台演出に関しては、学生と業者が相談して計画し、作品のイメージに合わせた曲や照明の選択を行った。また本番の1ヶ月前から、数回にわたる業者を交えた練習会を設け、土曜や日曜を利用し音楽に合わせた歩き方や、舞台構成の検討・修正、さらに専門業者によるメイクアップおよびヘアメイクの講習を実施した。

和洋女子大学では大学祭を「里見祭」の呼称で、11月最初の土曜日と日曜日に開催することが恒例となっており、直前の木曜日と金曜日は公式準備期間として休講措置が執られている。実際の舞台を可能な限り長時間学生のリハーサルに使用させるため、水曜日の当該教室の講義が終了後、舞台天板の設営を行い、木曜日は終日学生が練習に活用し、翌金曜日の朝から業者による、舞台意匠、照明装置等の搬入設営が行われた（写真1）。金曜日の15時から数回にわたる本番同様の照明を使用したリハーサルが行われた（写真2）。



写真1



写真2

3. 実施

3-1. 初年度

2004年11月6日（土）、7日（日）の二日間、両日各二回、「自然」をメインテーマとして計四回実施した。

第一日目は緊張と練習期間が必ずしも十分ではなかったためか、若干動きに不自然さが認められたものの、大過なく経過し観客の反応も好意的であった。第一日目の終了後も、学生達は自主的に練習会を持ち、反省点を出し合い、業者を交えて動作やタイミングの確認を行

っていた。第二日目に入り、回を重ねるごとに学生の動きに自然さと余裕が感じられるようになり、確実に進歩していく様子が感じられた。観客動員も好調で大学祭の来場者の多くが興味を持ち、6日の一回目以外は満席で入場を制限する必要があった。

また、入場時の混乱を回避するための整理券方式や、女子大での実施の観点から最前二列を女性専用にし、撮影を許可制にするなどの会場内規制は有効に機能した。併せて、出演者らの後輩に当たる服飾造形学科の2年次学生を会場の整理と来場者の誘導に20名ほどボランティアとして招集した。このことは当該学生の次年度の運営理解に役立ち、以降恒例となった。

一方で、最終回の終盤で大学祭の学内アナウンスが会場に流れ、この件を巡って出演した学生と大学祭実行委員会の考え方の違いが浮き彫りになり、学科長およびクラス担任がその収拾に手間取ったことで、大学祭期間での実施が困難になる事態にまで発展し次年度以降にかけて大きな反省点となった。

3-2. 二年目以降

二年目は一年目の反省を受けて、大学祭実行委員会、学生課からの指示に慎重に対応し、準備は順調に推移した。一年目と同じ専門業者にそれぞれの業務や指導を委託する事で、学生、教員、業者間の連携も良好であった。しかしながら作品の完成期限に間に合わない学生の取り扱いを巡って、教員の一人が学科会議の決定に従わず、舞台を控えた学生全体を混乱させた事は、これまでのファッションショーの歴史の中で特に重要な反省点となっている。しかし、一方でこのことにより教員組織の見直しが行われ次年度以降の大きな糧となり、指導体勢は長足の進歩を遂げた。

三年目からは準備の負担と観客動員動向から土曜日の公演を一回とし、二日間で計三回の公演とした。上演風景を写真に示す(写真3-5)。

また、それまでの二年間に撮影を巡って会場内で細かいトラブルがあったため、三年目からは観客の一切の撮影を禁止し、専門業者と代表学生による撮影と、最終回後の会場での保護者との記念撮影会を設ける事で対処した。同時に、学生達による会場整理についても、専門の警備業者による制服警備を委託することで、犯罪防止の対策とした。これらは、それ以降も継続されており極めて有効に機能している。

四年目からショー直前までの準備や、当日の舞台運営を「ファッションショー」という集中開講科目として設定する事で、衣装作品制作を行わない学生にも、オープニング映像やポスターの制作等の多様な形態での参画による単位認定を可能とした。



写真3



写真4



写真5

4. 教育効果

計画段階で全員参加による教育効果を期待し、卒業に必要な必修科目としての設定を行い、全員が自作の作品を着装して舞台上に立つ事としたが、学生の性格や容姿から、画一的に舞台上に上がらせる事が一部の学生に相当なストレスを与えている事がその後の聞き取り調査で明らかになってきた。そのため、二年目終了段階で次年度入学生から選択科目に変更し、卒業要件から外した。また、同時にモデルを立てて作品を発表する方法を選択できるように変更した。

参加した学生の評価は、総じて達成感を公約数とするもので、在学中最大の思い出と評するものが支配的であった。卒業制作に準じる大作を3年次で経験する事は学生にとって確実な成長をもたらすとともに、集団で同一の目標に向かわせることでチームワークの重要性を体得させる貴重な機会となった。

また、個人的に指導することで、和裁や洋裁の分野で用いる自分のイメージ通りの布のオリジナル染色等、通常の授業では実現できない高度な技術を習得させることが出来た。

しかしながら、2年次の後期という早期から着手させたことで、技術的に未熟な学生が、技量をわきまえずに高度な技術を要する作品に挑戦したり、ファッションショーという名前に踊らされて、極端に奇抜なデザインや技巧に走った作品を手がけたりしたため、本質的な技術の向上という点で課題を残した面も否定できない。このことは、想定以上に教員の負担を増加させる結果にもつながった。

また、和裁の分野では、基本的な形や技術の習得が到底完了していない段階から、様式や

縫製を独断でアレンジしようとする事で、本来取得しなければならない基礎技術がおざなりにされた傾向が問題点として強く指摘された。

従って、教育効果という点では全体として一定の評価は出来得るものの、詳細な分析によれば、功罪併せ持つ結果となった。

5. 問題点

本教育カリキュラムの実施による具体的な問題点として、以下のような点が挙げられる。これらの点は、今後のカリキュラム編成や学生指導、教員の信頼関係構築のために活かしながら改善のための糧としていきたいと考えている。

- ・最も重要な問題点として、多数の教員、学生が、大きなイベントに長期にわたって関わることで、多様な価値基準が交錯し人間関係に深刻な障害を生じることがしばしば認められた。
- ・担当教員全員の会議で決定した学生指導基準を特定の教員が守らなかったことで、結果として他の教員の名誉を傷つける行為があり、学生にも影響を与える結果になった。
- ・同一科目に関わる複数の教員が、個々に採点を行う際の判断基準が異なったため、不公平感が生じた。
- ・ファッションショーという概念が教員によって異なり、制作指導の方法や価値観を統一できなかった。
- ・学生の価値観も多用で、必ずしもショーの舞台に上がりたくないという学生が10~20%程度いることが分かった。
- ・大学で決められた規程の担当コマ数を超え、ほとんどの教員がボランティアとして指導に当たったため、極端な負担増加を強いることとなった。

6. 総括および今後の展開

総じて学生にとっては大変貴重な経験をさせることが出来、有効であったと考えられる。特に卒業制作以外の大作を手がけさせられたことと、見せるということで情報発信型の教育が出来たこと、チームワークの精神を養わせる機会を与えたことは大きな収穫であったと考えられる。他方、前項で述べたように、多数が長期にわたり関わる作業の中で、学生、教員を問わずいくつかの課題を生じた事や、未熟な技術のまま高度な作品を手がけて技術の習得不良を生じるなど、いくつかの反省課題が残った。

本ファッションショーは最新のカリキュラムの見直しで、授業コマ数の公平負担の考え方

等の観点で現状のまま正課のカリキュラムに残すことが出来なくなった。しかし、本教育研究で得られた教育効果の大きかった部分を残して、発展的にカリキュラムを再編成し、より高い完成度の作品を目指し卒業制作ショーという形に更新していくことが決定されている。これまでに得られた貴重な反省材料を活かし、更に教育効果の高いカリキュラムへとつなげていきたい。

付記

本教育プログラムは、平成16年度から19年度にわたり文部科学省私立大学教育研究高度化推進特別補助金の「教育・学習方法等改善支援経費」によって経費の一部が負担され実施されたものがある。

鬘 谷	要	生活科学系衣生活学研究室	教 授
高 橋	和 雄	生活科学系衣生活学研究室	教 授
榎 本	春 榮	生活科学系衣生活学研究室	准教授
羽 生	京 子	生活科学系衣生活学研究室	教 授
石 原	頼 子	生活科学系衣生活学研究室	准教授
布 臺	博	生活科学系衣生活学研究室	准教授
嶋 根	歌 子	生活科学系衣生活学研究室	教 授
仲 村	洋 子	生活科学系衣生活学研究室	准教授
福 田	瑛 子	生活科学系衣生活学研究室	教 授

